

問題一 次の文章を読んで、後の問い（問一～問五）に答えよ。

アメリカの食べ物といえば、ハンバーガーとフライドポテトを真っ先に思い浮かべる人が多いだろう。だが、アメリカ人が週に三回以上食べるとされるこれらはいずれも、北アメリカ大陸に暮らしていた先住インディアンの食べ物でもなければ、後のアメリカ合衆国となる植民地を築いた中心勢力であるイギリス系白人のレパートリーでもない。ハンバーグはドイツ料理だし、フレンチフライの（a）イミヨウウからもわかるように、フライドポテトも元はフランスやベルギー式の食べ方だ。また、アメリカは世界最大のピザ消費国だが、そのピザも、イタリアが起源である。しかも、こうした非イギリス起源ながら現在ではアメリカ人の食生活に欠かせない存在となっている食べ物に対しては、ファーストフード的な画一化された食というイメージを持っている人が多いだろう。だが、実際にはアメリカでは、グルメバーガーやグルメピザと呼ばれる、ファーストフードとは一線を画す路線を追求しているレストランも少なくないし、地方ごとのバリエーションもある。

ア シカゴに行けば、シカゴスタイル・ホットドッグとか、シカゴスタイル・ピザと呼ばれるものがある。フランクフルト（ドイツ料理）もピザもイギリス起源ではないが、さらにそれが一風変わったスタイルに進化しているのだ。シカゴのホットドッグは、フランクフルト以外にも、トマト、タマネギ、ピクルス、ハラペーニョなどを、まるでハンバーガーのような感覚でパンに挟む一方、定番のケチャップは使わないことが多い。また、シカゴのピザは、ディーブディッシュ・ピザと呼ばれ、生地が分厚く、中にソーセージやマッシュルーム、ピーマンなどが埋め込まれている。アップルパイのような形状で、パイの中身の部分にチーズとともに具がぎっしり詰まっている姿を想像してもらえばよい。一九二九年の大恐慌から第二次世界大戦にかけての食糧難の時期に、一回の食事で十分な栄養を取れるようにしようと普及した食べ方が、今やローカルフードとして定着しているのだ。

このように、典型的なアメリカ料理と思われるものは、実際には非イギリス起源であるだけでなく、世界の他のどこにも存在しなかったようなユニークな姿に変身している例もある。一方、日本では一般にはあまり知られていないことかもしれないが、映画鑑賞の（b）ピッツジュ品ともいべき、アメリカを代表するポップコーンは先住インディアン由来の食べ物だし、フライドチキンは黒人奴隷と深い関わりを持つ。パーティーメニューの定番、バーベキューに至っては、先住インディアンと黒人奴隷の両方の存在なくして成立しえなかった料理だ。

長らくアメリカ社会の実権を握ってきたのは、イギリス系の白人である。だが、このようにアメリカを代表する食べ物は、決して彼らの食文化の遺産というわけでもなければ、よその国の食べ物の単純なコピーという存在でもない。概してアメリカは、食に関しては後進国のように思われがちだ。だが、人為的集団統合を宿命づけられたアメリカは、イギリスのみならず、非西洋や移民の食文化の伝統から国民的食べ物を生み出すという、実は想像以上に複雑な過程を経て（1）独自の食文化を築き上げたのだ。

ある集団がどのような料理を食べるのか、**イ**、いつからいかなる理由で食べるようになったのかといったことは、その集団の正体を考える重要な糸口になるはずだ。そして、アメリカの食文化は、イギリス系の人々のアングロサクソン文化Ⅱアメリカ文化と単純に片づけるわけにはいかない、という事実を語っている。このことは、「アメリカは、イギリス系白人がアングロサクソン文化にその他の人々を同化させることによって国民統合を成し遂げてきた」という従

来型のアメリカ観への疑問を突きつけるとともに、「アメリカ人とはいかなる集団か」、また、「アメリカ文化とは何か」という問いをあらためて提起する。

しかも、こうしたいわばよそ者の食文化が、ファーストフードという画一化への圧力を受けつつも、独自のローカルフードをも生み出してきた経緯は、アメリカのファーストフードの正体が単なる食の標準化現象として語りつくせないことを暗示する。実際、アメリカにおけるファーストフードの成立過程は、産業社会の食の変革と深く結びついたのであり、そこには様々な創造性もはたらいていた。アメリカ食文化の歴史は、この国の異種（c）コンコウ的な背景が産業社会という器の中で新たな実験へと展開されていた軌跡でもあるのだ。

ウ、その実験は、必ずしも良い成果ばかりを生んだわけではなかった。ファーストフードへの依存が高まるにつれ、アメリカは肥満大国と化し、低コスト化への圧力によって農業の形までもが歪められてしまった。だが現代アメリカでは、脱ファーストフードに向けた様々な試みが芽生えており、移民大国アメリカの食をめぐる実験は（2）新たな段階を迎えつつある。結果的にファーストフードの黄金時代を作り上げてしまった産業社会の食の変革は、今度は健康志向や、西洋料理という枠を超越した地域横断的で大胆な食の結合を強く意識するようになってきている。ベジタリアン・メニューの開発が盛んに行われ、メキシカンボウル（メキシコ丼）のようなラテンアメリカ料理とアジア料理を合体させた新たな創作エスニック料理が登場している状況は、食文化が貧しいと思われがちなアメリカが実は豊かな食文化のポテンシャルを持っているという、常識を覆す視点へと私たちを導いてくれる。そして、こうした潮流は、アメリカ発のファーストフードが世界を（d）セツケンしたように、未来の世界にも大きな影響を与える可能性がある。

エ 食べ物は、人間の身体を形作る存在であり、生命の安全に関わっている。つまり、何をどう口にするかは、一見すると極めて個人的な選択のように見えるが、食材をどう生産し流通させ、どのような食事として提供するかという営みは、食の安全や人々の健康といった公共の福祉と切り離すことはできない。個人という次元を超えた社会的合意（ないしは不服従）の次元を含んでいるのだ。

とすれば、食べ物の歴史は、人々による社会的選択（あるいはその失敗）をも（e）タイゲンしているものであり、そこにはその集団がたどってきた変革の記憶が刻まれている。食文化史は、アメリカ社会の価値観の変遷や対立を浮き彫りにするとともに、この国がどのように生まれ、現代アメリカがどのような社会へと向かいつつあるのかも教えてくれる。なぜアメリカではファーストフードが発達したのか、また、現代アメリカではなぜ国境横断的なフュージョン料理が流行しているのか、さらには、農家と消費者の新たな関係を模索する動きがなぜアメリカでは広がりつつあるのかといった疑問は、アメリカという国の社会的価値観や文化的創造力のゆくえを照射することに通じているのである。

オ 食文化史は、アメリカという国の特質や創造性、現在位置を把握する貴重な情報を含んでいる。だが、日本で食べ物の研究というと、多くの場合は栄養学的なアプローチが中心で、外国文化研究に活用する発想はあまり見られない。しかし、上述したように、アメリカの食べ物が伝える記憶に目を止めることは、この国が何をしてきたのか、何ができなかったのか、何をこれからしようとしているのかといった、アメリカという国の核心と今後の動向の両方をより鮮明に捉えることにつながる。

問一 傍線部 (a) く (e) を漢字にしたとき、そのうちの一字を含むものを次の (1) く (4) の中から、それぞれ一つずつ選べ。その際 (a) く (e) は、それぞれ解答番号 1 く 5 に対応するものとする。〔解答番号 1 く 5〕

(a) イミヨウ	(1) 意味	(2) 明朝	(3) 名所	(4) 移籍
(b) ヒツジュ	(1) 必勝	(2) 受容	(3) 筆跡	(4) 寿命
(c) コンコウ	(1) 流行	(2) 購入	(3) 公開	(4) 交通
(d) セツケン	(1) 出席	(2) 拙者	(3) 責任	(4) 懸命
(e) タイゲン	(1) 現代	(2) 泰平	(3) 限定	(4) 耐久

問二

ア

 く

オ

 に入るものとしてもっとも適切なものを、次の (1) く (5) の中から、それぞれ一つずつ選べ。その際

ア

 く

オ

 は、それぞれ解答番号 6 く 10 に対応するものとする。〔解答番号 6 く 10〕

- | | | |
|-----------|----------|---------|
| (1) もっとも | (2) そもそも | (3) 例えば |
| (4) このように | (5) また | |

問三 傍線部 (1) 「独自の食文化」に関する説明として適切なものには (1) を、適切でないものには (2) をそれぞれマークせよ。その際 (i) く (iv) は、それぞれ解答番号 11 く 14 に対応するものとする。〔解答番号 11 く 14〕

- (i) フランクフルトもピザもイギリス起源ではないが、シカゴスタイルとして一風変わったスタイルに進化している。
- (ii) 食糧難の時期に、一回の食事で十分な栄養が取れるように普及した食べ方が、ローカルフードとして定着した。
- (iii) 長らくアメリカ社会の実権を握ってきたイギリス系の白人の食文化が、その他の人々を同化させながら形成されてきた。
- (iv) 典型的なアメリカ料理と思われるものは、ポップコーンやバーベキューのように、実際には世界の他のどこにも存在しなかったものだった。

問四 傍線部 (2) 「新たな段階」に関する説明として適切なものには (1) を、適切でないものには (2) をそれぞれマークせよ。その際 (i) く (iv) は、それぞれ解答番号 15 く 18 に対応するものとする。〔解答番号 15 く 18〕

- (i) 健康志向や、西洋料理という枠を超越した地域横断的で大胆な食の結合を意識するようになってきた。
- (ii) ファーストフードという画一化への圧力を受けつつも、独自のローカルフードを

も生み出すようになった。

(iii) ファーストフードへの依存から肥満大国と化し、低コスト化への圧力によって農業の形までもが歪められるようになった。

(iv) アメリカ発のファーストフードが世界へ進出したように、今度はアジア料理がアメリカの豊かな食文化のポテンシャルを高めるようになりつつある。

問五 次の①～④の文を読み、本文の内容と一致しているものを一つ選べ。〔解答番号

19〕

① 何をどう口にするかは、極めて個人的な選択のように見えるが、実際は公共の福祉と切り離すことができないため、個人という次元ではなく、社会的合意の次元において捉えなければいけない。

② 食文化史は、アメリカという国の特質や創造性、現在位置を把握する貴重な情報を含む。一方で日本における食べ物の研究は、栄養学的なアプローチが中心で、食文化史として捉えられない。

③ アメリカでは、グルメバーガーやグルメピザと呼ばれる、ファーストフードとは一線を画する路線も追及されていたり、地方ごとのバリエーションもあつたりして、画一化された食というイメージとは異なる側面もある。

④ パーティーメニューの定番であるバーベキューは、先住インディアンや黒人奴隷の両方の存在なくして成立しなかったゆえに、移民との衝突や、奴隷制度の歴史を反省する素材を食文化史は与えてくれる。

問題二 次の文章を読んで、後の問い（問一～問五）に答えよ。

本書がこれから試みようとしているのは、「平成」という失敗についての一種の博物館を、一冊の本のなかに実現することである。一九八九年から二〇一九年までの「平成」の三〇年間は、一言でいえば「失敗の時代」だった。「失われた三〇年」と言ってもいい。この時代には、様々な分野で数多くの「失敗」が繰り返されていったが、それらの「失敗」を数え上げることが容易でも、それら全体がどのように結びついていったのか、私たちはなぜ三〇年も「失敗」の連鎖から抜け出すことができなかったのかを示すことは容易ではない。平成の「失敗」は、いったいどこまでが必然だったのか――。平成時代に誰かが大きなミスを犯し、社会を失敗に導いたとは必ずしも言えない。それぞれの組織や職場において、人々は精一杯の努力をしてきたように思う。それにもかかわらず、失敗の連鎖からこれほど長い間、抜け出すことができなかったのはどうしてなのだろうか。

朝日新聞社が二〇一八年の三月から四月にかけて行った世論調査では、「平成」がどんな時代だったのかを、八つの選択肢から選んでもらう仕方で行っている。その答えとして最も多かったのは「動揺した時代」という回答で四二％、これに次ぐのが「沈滞した時代」で二九％だった。これらに対し、「明るい時代」は最下位だった。この傾向は、同社が二〇〇九年に二〇歳以上に限定して行った世論調査から変化しておらず、そこでも「動揺した時代」という回答が四二％を占めて最多、第二位の「沈滞した時代」も四〇％に上り、最下位は「明るい時代」だった。多くの日本人にとって、「平成」は自分たちの社会が危機に陥り、対応に失敗し、沈滞していった時代として認識されてきたのである（『朝日新聞』二〇一八年四月三〇日）。

平成の「失敗」のなかで最も（a）ケンチヨなのは、金融を中心とする大企業の失敗である。平成時代に倒産した企業は数多あるが、なんとといってもその代表は、かつて日本の四大証券会社の一角をなしていた山一証券であろう。当時、日本の金融業界は八〇年代半ばから株価が空前の上昇を示すなかで、株価上昇、先物取引、複数企業による株の持ち合いで株価上昇はさらに続けられていた。しかし、株価は一九八九年末に付けた三万八九五円を頂点に急降下を始め、多くの企業のファイナンスを仕切る立場にあった山一証券は、その損失を隠蔽するために「トバシ」と呼ばれるリスクの高い取引を重ねた。こうした無理が他の証券会社以上に山一を袋（b）コウジに追いやることになり、遂に一九九七年、自主廃業せざるを得なくなる。

山一証券以外でも、銀行では北海道拓殖銀行が、山一と同じ一九九七年に二兆三〇〇億円の負債を抱えて倒産し、続いて翌九八年には日本長期信用銀行と日本債券信用銀行がバブル崩壊後の巨額な不良債権により、それぞれ三兆五〇〇億円、二七〇〇億円の負債を抱えて倒産した。保険会社では、二〇〇〇年に協栄生命が約四兆五〇〇億円の負債、千代田生命が約三兆円の負債を抱えて倒産した。一九九〇年代末から二〇〇〇年頃にかけてはこうした大型倒産が相次いだ時期で、これらの企業の多くがアメリカの投資機関に売却されていた。

産業全体でも、平成を通じた日本の電機産業の衰退は目を覆いたくなるほどだ。一九八〇年代まで、ソニーは携帯音楽端末「ウォークマン」の世界的なヒットをはじめ、まさに飛ぶ鳥を落とす勢いで、世界の若者たちの熱いまなざしを集めていた。ソニーの技術力とデザイン力を以てするならば、本当はiPhoneやiPadだって生み出せたのではなかったか。そう後から想像したくなるほどの勢いが、一九八〇年代までのソニーにはあった。

ア

九〇年代以降、ソニーは急激に失速していく。シリアン・テットは、この失速の原

因が「(1) サイロ・エフェクト」にあったと指摘している。隆盛期のソニーは、井深大と盛田昭夫という二人の経営者の強烈な個性にリードされてきた。ウォークマンの製造も、二人のトップダウンの采配がなければあり得なかった。ところが高齢の二人の経営者が退くと、後任の大賀典雄は、トップダウン方式だけでは引き継いで「プレイステーション」というゲーム機の開発に肩入れするがウォークマンのような世界的なヒットにはならず、社内には不満が鬱積していった。そして、その後を継いだ出井伸之は、巨大化した会社を一方に導くのは最初から断念し、会社を八つの独自性の高いカンパニーに再編してしまった。出井の施策はマネジメント的には合理的だったが、ソニーという特異な企業体から創造的な個性を奪った。イ、専門性の高いサイロをつくることで少なくとも短期的に会社の効率化は進んだように思われた」が、それぞれのサイロの経営陣は、「ライバル企業だけでなく社内他の部門からも「身を守るう」とした。他の部門と斬新なアイデアを共有しなくなり、優秀な社員の他部門への異動も避けられるようになった。部門同士が協力しなくなり、実験的なブレインストーミングや、すぐに利益を生まない長期投資も手控えるようになった。誰もがリスクを取ることに後ろ向きになった」(テット『サイロ・エフェクト』)。

このソニーのサイロ化は、同じ頃にステイブ・ジョブズがアップルで進めていた経営方針と正反対だった。ジョブズは、「社内にサイロをつくらうとはしなかった。そんなことをすれば管理職に未来に飛び込むより既存の製品アイデアや過去の成功にしがみつこうとするインセンティブを与えることになる」と考えたからだ(同書)。同じ考えから、ジョブズはアップルの製品を徹底して少数にとどめた。新製品の開発は、時代遅れになった製品を即座に廃止することと一体でなければならなかった。日本企業(そして日本社会一般)のように、新しいものを付け足しながら、古いものも曖昧に残していくというより安易な発展のスタイルを禁じていた。開発も(c)ソニエキも一元管理し、徹底して横断的な風通しの良さを維持するこのアップルの方式は、一九九〇年代に進行しつつあったデジタル化の流れともうまくマッチしていた。なぜならば、デジタル化とは、それまでの様々な異なる製品ジャンルが「デジタル」という単一の情報システムのなかに横断的に統合されていくプロセスだったからだ。逆に言えば、創業者を継いだソニーの経営陣がした常識的な経営は、時代の先端にいたはずのソニーを一周遅れの経営戦略に従わせ、時代の流れとは逆方向に向かわせてしまうことだったのである。

そして日本の電機メーカーで、ソニー以上に哀れな末路をたどったのは、シャープや東芝だった。さらに日立製作所も、主力商品だったテレビの国内販売から撤退している。東芝、日立、松下電器、ソニー、シャープ、サンヨーといったメーカーが覇を競っていた一九八〇年代には、ここまでの衰退が彼らを襲おうとは誰も予想していなかった。これらの企業の致命的な失敗が、なぜ平成に次から次へと起きていったのかについて、次章ではより詳しく検討したい。

それはもちろん、直接的には円高とバブル崩壊、その後の深刻な不況の影響なのだが、九〇年代後半から二〇〇〇年代にかけて、経済危機の波は日本のみならず世界各国を襲い、しかも電機メーカーに限らずあらゆる産業を襲っていた。しかし、八〇年代まで日本のメーカーに比べればずっと劣位にあった韓国のサムスは、今や日本メーカーを遥かに凌ぐグローバル企業である。日本の電機産業は、同じ業界でも韓国や台湾に完全に敗北した。この敗北の原因は、必ずしもバブル崩壊や大不況だけに帰することはできない。むしろ、ソニーがウォークマンの先にiPadやiPhoneがあることに気づかず、同時代に多くの家庭に人気のあったゲーム機に熱中したように、日本企業が「家電」というカテゴリーが崩壊した先の情報社会の姿を十分に真剣には見

据えていなかったことに、失敗の重要な一因がある。

平成を通じた経済の失敗と並行して、政治も失敗を重ねた。最初の躰まきは、細川護熙かみか政権にあった。一九九二年からの日本新党ブームは、同時代の政治改革ムードのなかで生じたことで、小池百合子のほか、野田佳彦、前原誠司、枝野幸男など、のちに民主党の中核をなしていくメンバーもこの時期にデビューしている。そして平成の政治の第二の躰まきはもちろん民主党政権である。民主党政権の大失敗は、今日の安倍晋三自民党一強体制を生んでしまった直接の要因だ。二〇〇〇年代初頭の小泉純一郎政権は、この二つの躰まきの間を生じたポピュリズム型の一点突破政治だった。平成を通じ、このような政治の激動が生じたのは、もちろん衆議院の選挙制度が小選挙区制に移行したことを背景としている。この選挙制度改革の目的は、日本に政権交代可能な二大政党制を根づかせることであつたが、結果はそうならなかつた。

こうした流れを念頭に宇野常寛は、「平成」は「失敗したプロジェクト」だと語つた。このプロジェクトが目指したのは、「グローバル化と情報化という世界的な二つの大きな波を正しく受け止め、戦後の社会をアップデートすること」だった。しかし、この「アップデート」を狙つた改革は、悉く失敗に終わった。政治において改革勢力が目指したのは、「二大政党制に基づいた成熟した民主主義」と「小さな政府を志向する構造改革路線」だったが、改革路線を志向するリーダーたちがポピュリズムで旧自民党的な（d）エンコ主義と対抗したために、改革は移りゆく風に翻弄され、気がつけば「自民党の内部改革を祈ることしかできない五五年体制に近い状況」に戻つていた（『朝日新聞』二〇一七年八月三〇日）。平成の政治は、どこでどう失敗していったのか。本書の第2章では、この問題を八〇年代末まで遡つて検討したい。

経済と政治の失敗は、社会の失敗とも表裏をなす。（2）平成における社会の失敗とは、超少子化と格差拡大を止められなかつたことだ。もつとも少子化、すなわち多産少死社会から少産少死社会への人口転換は、近代化を通じた人口構造の変化として生じてきたことで、これを回避することはできない。経済成長を遂げたすべての社会が、大なり小なり少子化を経験する。社会政策的に可能なのは、様々な措置を通じてその程度を緩和することである。合計特殊出生率（一人の女性が一生の間に平均して生む子どもの人数）を二・〇〇以上に維持できれば、その社会は長期安定的に持続していくことができる。しかし、それが一・五〇を下回ると、未来へのリスクが高まる。これがまさに平成の日本に生じたことだった。日本の超少子化が本格化するのには平成が始まる一九八九年で、同出生率は一・五七を記録する（一・五七ショック）。その後この率は下がり続け、九五年に危険水準である一・五〇を下回る。さらに二〇〇三年には一・三〇すら下回つて一・二九となり、〇五年には一・二六という破滅的な水準に達してしまう。

暗澹たる気持ちになるのは、この超少子化に関する限り、日本の失敗はもう取り返しがつかないことである。人口学的な知見によるならば、少子化に向かう先進国は、合計特殊出生率が一・五〇に近づいたところで、そこから二・〇〇に向けて出生率が回復していく国と、出生率がさらに低下して一・五〇を下回っていく国に分かれる。運命の分かれ目である。日本の場合、この分かれ目は一九八〇年代末に訪れた。そして一度、一・五〇を下回ってしまった国は、もはや二度と出生率を一・五〇以上に回復させることができない。経済の未来予測とは異なり、人口学的未来予測はかなり確度が高い。

ウ

、少なくとも二一世紀半ばまで、日本は超少子化を解決することができず、この国の人口は減り続けるのである。

問題を深刻化させた原因はいくつも考えられる。たとえば、人口の再生産では巨大な人口ブラス

クホールのような東京への一極集中や公的な保育施設の未整備、育児休職後のキャリアパスの軽視、公立の初等中等教育の劣化、受験中心の教育システムがもたらす親への経済負担など、一般に論じられてきた多くの問題がある。さらに、ひとり親家庭に対する経済的支援の拡充や離婚した母親が父方から受け取る（e）ヨウイク費の強制化、選択的夫婦別姓の実現、養子縁組制度の充実といった課題もある。超少子化をより緩やかな少子化に変化させていくためには、これら多数の課題解決が同時並行でなされていかなければならない。だが、一九八〇年代の日本はバブル経済に浮かれ、平成に入ってもこれらの課題への取り組みは単発的、かけ声倒れなものにとどまった。その結果、超少子化が二一世紀半ばまで続くことになり、日本社会が現在の民族的構成を維持して安定的に持続していくことは、すでに難しくなっている。そうした困難な回路に日本が入っていたターニングポイントが平成にあり、それは日本の歴史が百数十年単位で成長の時代から衰退の時代に転じていく時期とも重なっていた。

平成の日本が超少子化を克服できなかったもう一つの理由は、（3）新しい貧困、つまり親族的紐帯の強い発展途上国の貧困とは異なる、社会的繋がり薄い孤独な貧困層の拡大だった。バブル崩壊で資金繰りが苦しくなるなかで、企業はそのしわ寄せを労働者サイドに向け、雇用に弾力化して非正規雇用の労働者を大幅に増やしていった。その結果、平成半ばには非正規雇用が雇用全体の約四割を占めるまでになり、かつてあった日本人と仕事の有機的な関係が総崩れになった。それぞれの企業からすれば、生き残るために他に道がなかったのかもしれないが、この選択は社会全体に破滅的な結果をもたらした。非正規雇用の激増は、賃金格差の拡大だけでなく、労働者の生活基盤を崩壊させ、彼らの人生を著しく不安定にした。企業単位に福祉制度が整備されてきた日本では、この企業のセーフティネットから労働者が排除されてしまうと、そこでは福祉がまったく機能しなくなる。こうして平成を通じ、貧困層の増大とその生活の急速な不安定化が進んだ。そうした変化が起きたとき、すでに労働組合が労働者全体の生活を守る組織としてはほとんど機能しなくなってしまうていたことも事態をさらに悪くした。

エ、これらの出来事がすべてからく「失敗」に見えるのは、ひよっとすると現在を「平成」が始まった一九八〇年代末の日本やそこで期待されていた未来と比較するからなのかもしれない。「平成」の始点は「昭和」の終点である。そしてこの「平成」の終わりから始まりを眺め返すなら、まさに「昭和」の結末こそ問われるべきものとなる。当時、昭和天皇の病状悪化を受けた自粛騒動が全国で渦巻いても、「これで不況になるほど、今の日本経済は弱くない」とされていた。一九八八年の経済成長率は政府の見通しを上回り、「高天原景気」という言葉も登場した。失業率も低く、学生の就職は大変な売り手市場だった。円高が産業にとってリスクとしてあるものの、余裕がある間に体質改善と技術革新を進め、より付加価値の高い製品を生み出していくなら、今後も年五％程度の成長が続ぎ、二〇〇一年に日本のGNPは約七〇〇兆円となり、「空前の経済大国として二一世紀を迎える」と楽観されていた。

オ、若者たちがきらびやかな消費社会に浮かれるなかで、大人たちは成長社会から成熟社会への転換、つまり量から質への転換が今こそ必要なのだと論じていた。「豊かさ」や「幸せ」を定義し直すことができるのは今しかない。まだ、人々が経済的な豊かさを享受できているうちに、モノへの固執から脱してコトの豊かさ、文化的創造性に転換していかなければいけないというわけだった。——だが、成熟社会とはより付加価値の高い、つまり高価な商品消費していく社会のことなのか。それとも本当にコトの豊かさや文化的創造性に社会の価値軸を移した場

合、経済成長一本槍でやってきた日本はその産業力を維持し続けられるのか。経済と文化を両立させる教育や雇用、福祉の仕組みはいかなるものなのか。そういった困難な問いが、社会全体で議論されることはなかった。要するに、未来を甘く見ていたのである。

(吉見俊哉『平成時代』より)

問一 傍線部 (a) ～ (e) を漢字にしたとき、そのうちの一字を含むものを次の (1) ～ (4) の中から、それぞれ一つずつ選べ。その際 (a) ～ (e) は、それぞれ解答番号 20 ～ 24 に対応するものとする。〔解答番号 20 ～ 24〕

(a) ケンチヨ	(1) 著書	(2) 貯金	(3) 検査	(4) 一緒
(b) コウジ	(1) 交通	(2) 道路	(3) 事件	(4) 地面
(c) ソンエキ	(1) 存在	(2) 尊敬	(3) 利益	(4) 液晶
(d) エンコ	(1) 延長	(2) 子供	(3) 円満	(4) 縁側
(e) ヨウイク	(1) 栄養	(2) 要請	(3) 内容	(4) 太陽

問二

ア

 ～

オ

 に入るものとしてもっとも適切なものを、次の (1) ～ (5) の中から、それぞれ一つずつ選べ。その際

ア

 ～

オ

 は、それぞれ解答番号 25 ～ 29 に対応するものとする。〔解答番号 25 ～ 29〕

- (1) ところが (2) すなわち (3) つまり
(4) しかし (5) たしかに

問三 傍線部 (1) 「サイロ・エフェクト」に関する説明として適切なものには (1) を、適切でないものには (2) をそれぞれマークせよ。その際 (i) ～ (iv) は、それぞれ解答番号 30 ～ 33 に対応するものとする。〔解答番号 30 ～ 33〕

- (i) ウォークマンの成功が、井深大と盛田昭夫という二人の経営者の強烈な個性にリードされてなされた。
(ii) 八つの独自性の高いカンパニーに再編したことで、短期的には会社の効率化は進んだように思われたが、ライバル企業だけでなく、社内の他の部門からも「身を守ろう」とした。
(iii) 会社を独自性の高いカンパニーに再編することで、トップダウン方式で一方に導くことから生じる社内の不満を解消しようとした。
(iv) ジョブズは、ソニーの場合とは正反対に、管理職に既存の製品アイデアや過去の成功にしがみつこうとするインセンティブを与えないようにした。

問四 傍線部 (2) 「平成における社会の失敗」とはどういうことか、適切な文には (1) を、適切でない文には (2) をそれぞれマークせよ。その際 (i) ～ (iv) は、それぞれ解答番号

34 ～ 37 に対応するものとする。〔解答番号 34 ～ 37〕

- (i) 多産少死社会から少産少死社会への人口転換は、近代化を通じた人口構造の変化として生じてきたことであり、これを回避することはできない。
- (ii) 一九八〇年代末に合計特殊出生率が一・五〇に近づきながらも、単発的、かけ声倒れな対策にとどまり、有効な手立てを打つことができなかった。
- (iii) 合計特殊出生率が二・〇〇以上に維持できれば、その社会は長期安定的に持続できると、一・五〇を下回ると、未来へのリスクが高まる。
- (iv) 一度、合計特殊出生率が一・五〇に近づいていくと、そこから二・〇〇に向けて出生率が回復していく国もある。

問五 傍線部(3) 「新しい貧困」に関する説明として適切でないものを、次の(①)～(④)の中から一つ選べ。〔解答番号 38〕

- (①) 企業単位に福祉制度が整備されてきた日本では、企業のセーフティネットから労働者が排除されてしまうと、ここでは福祉がまったく機能しなくなってしまう。
- (②) バブル崩壊に伴う資金繰りの悪化を受けて、企業はそのしわ寄せを労働者サイドに向け、その結果、労働組合もほとんど機能しなくなってしまう。
- (③) 親族的紐帯が強くある発展途上国の貧困とは異なり、社会的繋がりの薄い孤独な貧困層が拡大した。
- (④) 非正規雇用の割合が高まり、賃金格差の拡大だけでなく、労働者の生活基盤も崩壊させ、彼らの人生を著しく不安定にした。

【問題は以上で終わりです。】